

# 「我が人生思い残すことなし」(前編)

きたこう はると  
作：北郷遥斗

※ 前回までのあらすじ ― 戦時中神戸で暮らしていた昭男は、母きみと街中で空襲に遭った。すさまじい光景を眼のあたりにしながら、弟妹の待つ家に逃げ帰った時、昭男はこの戦争の勝利を胸に誓い、きみが決断した事は広島への疎開だった。―

## 3. 疎開

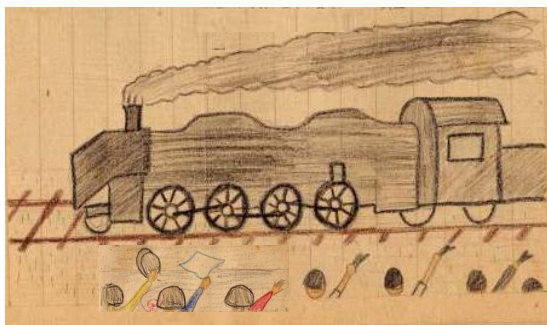
「広島の実家に手紙を書いたら返事が来たんや。向こうも市内はいつ空襲になるか分からん状況やし、子供らは皆、さらに身内を頼って『安佐』に疎開するそうや。広島から山2つ越えて、4時間程歩いたとこや。」母は傘に黒い布切れを掛けた電球の下のテーブルの前に座って、向かいの高子と昭男に語りかけていた。あとの4人の弟妹はすでに隣の薄っぺらい敷布団

だけの床の上で転がる様に眠っていた。小学生ばかりのこの年頃だと、戦争も食料難もまるでなかった様に生きている。そんな健気な姿に『必ずこの子らだけは何としてでも守ってやらんと…』と、母のきみは切に願うのだった。「ただな。向こうも、うちの子みんなが行ったら、面倒見るもんが足らん



なようにるさかい、うちも一緒に付いて行く事になったんや。」きみは話しを続けた。「もし、お父さん帰って来やはったら困るやろうけど、こうなったらしゃあないしな…」高子は母の言葉を黙って聞いていた。自分ではどうする事も出来ひん。全て母の言う通りにするしかないからだ。「俺は残る。」静かに、でも強く決意した様に昭男が口を開いた。

「そしたらお父ちゃんが帰って来やはっても心配あらへん。」「居るって、ごはんとかどうすんの？お父さん帰って来やはるって限らへんで。」「大丈夫や。働いて稼ぐ。」「学校は？」



「行かへん。」昭男にとって勉強などもうどうでもよかった。もうすぐ軍隊に入って、立派に戦って『お国』のために死んで靖国神社に行く。それしか頭になかった。アメリカに対する激しい怒りと敵対心は確固たるもので、その信念を曲げない一途な性格は、まさに父親譲りだった。ただ、戦争反対の父親

とは、その主張は全く正反対のものだったが… きみは、その気持ちはよく知っていた。それだけにそれ以上何も言えなかった。「分かった。好きにしい。」それだけ言うとじっと動かなかった。5日後、昭男以外母子6人は広島行きの夜汽車に乗った。昭男は見送りにも行かず、暗い須磨の海を何時間も見つめていた。

(つづく)